

# 忍ぶ川

## 映画文学人生論

原作：三浦哲郎 (1960年) 「新潮」  
監督：熊井啓 (1972年) 脚本：長谷部慶次 熊井啓  
出演：志乃 栗原小巻 撮影：黒田清巳  
哲郎 加藤剛 音楽：松村禎三  
哲郎の父 永田靖  
哲郎の母 滝花久子 志乃の父 信欣三

深川は私が生まれた土地です

『忍ぶ川』の風景はなつかしい。人情も。

三浦哲郎の原作は昭和三十五年上半期の芥川賞受賞作、当時ではめずらしく古風な大正ロマンの小説と評された。熊井啓監督の映画は深川や木場など東京の下町、それに東北の雪国の映像が昔の日本のなつかしいものを視覚で訴えかけてくる。

「忍ぶ川」は山の手の国電の駅近くある料亭、そこで働く女が志乃（栗原小巻）だった。都の西北の大学生哲郎（加藤剛）は寮の卒業生の送別会が「忍ぶ川」で行われたとき、志乃と出会った。

それからまだ間もない頃、哲郎は志乃を連れて深川へ行く。「深川は私が生まれた土地です」と映画の志乃は言うが、原作では「深川は、志乃が生まれた土地である。深川に生まれ、十二のとしまでそこで育った」と説明されている。

昭和二十年の東京大空襲で深川一帯は焼き払われたが、志乃はその前年、栃木へ疎開したので無事だった。戦後の深川は知らない。一方、東北出身でも哲郎は日曜日になると深川を歩きまわるならわしだったので、よく知っている。そこで、いわば生粋の深川っ子を深川に案内することになった。志乃は「あああ、すっかり変わっちゃって、まるで知らない町へ来たみたい」という。

二人は木場から州崎へ向けて歩いた。木場は、木と運河の町で、今も面影を残している。州崎は娼婦の街だったが、今は昔の面影はない。昭和二



## 忍ぶ川

映画文学人生論

十年の東京大空襲、それに昭和三十一年施行の売春禁止法の影響が大きい。

昔の面影をかいま見たいと思えば、芝木好子原作、川島雄三監督の映画『州崎パラダイス 赤信号』がある。やはり娼婦の街だった玉の井なら永井荷風原作の『墨東奇譚』だ。

実は私は三浦哲郎や永井荷風に感化されて、木場、州崎、深川、玉の井界限を何度もうろつきまわったことがある。連れはなく、志乃のような美人と出会ったこともないが、なつかしい、東京散歩をするとすれば、このコースだ。

しかし、『忍ぶ川』の哲郎が深川を歩きまわったのは、永井荷風のような世捨人の心境からではない。暗い宿命に押し流されまいとして必死で生きる気持をかきたてるためだった。

哲郎は六人きょうだいの末っ子だが、六歳の誕生日に二番目の姉が投身自殺。続いて上の姉が服毒自殺、長兄は失踪した。次兄は深川で働いていて、哲郎を大学へ入れてくれたが、木材会社を設立するという名目で資金あつめに帰郷し、親や親戚から借金して、行方をくらました。

恥の家系——哲郎は一家の衰運がはじまった誕生日に深川へ行く。それ以来、心がおとろえ、宿命に負けそうになると、それに反発するかのよう

に深川を歩き、志乃との出会いに結びつけた。

思い出の木場深川や釣りしのぶ